



水稻の斑点米カメムシ類の防除を徹底しましょう！



県内における水稻の品質低下（等級落ち）の主な原因としては、乳白米や黒点米など障害粒の発生とカメムシ類による斑点米の混入があります。これらはいずれも高温の年に、発生しやすい傾向で、今年も注意が必要です。

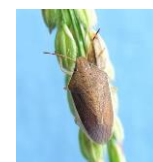


県病害虫防除所の調査（令和5年1月27日発表の病害虫発生予報2月号：防除所レポートより）によると、県内37か所の定点で斑点米の調査を行った結果、令和4年産の斑点米の発生は県北地域ではクモヘリカメムシによる被害が多く、県南、県西、鹿行、県央ではイネカメムシの被害が多くなりました。

イネカメムシは1950年代までは茨城県で斑点米の主要種でしたが、その後は急激に減少しましたが、近年は再び発生が多くなっています。従来の斑点米カメムシに比べ、本田への侵入がやや早く、成虫やふ化した幼虫が斑点米を発生させる他、多発生すると不稔を発生することがあり大きな減収となります。



クモヘリカメムシ



イネカメムシ

斑点米カメムシ類の防除は、イネの出穂期が有効な防除時期となります。

写真：病害虫防除所

水稻の出穂予測時期は、農業総合センターの「水稻生育情報」によると、「あきたこまち」では水田利用研究室（龍ヶ崎市：4月27日植え6月27日調査）で平年より1日遅い7月13日頃、作物研究室（水戸市：5月1日植え6月29日調査）で1日遅い7月17日頃となっています。また、「コシヒカリ」では前者が平年並の7月24日頃、後者が平年より1日遅い7月28日頃となっています。

圃場の出穂状況をよく確認して、下記の防除適期に薬剤防除を必ず実施してください。

防除対策

1. 本田に侵入したカメムシ類を対象とした防除時期は、出穂期～穂揃期です。
なお、イネカメムシが主体の多発圃場では不稔等による減収を防止するため、出穂期前後にイネカメムシが確認されたら直ちに薬剤防除を行います。
2. 斑点米の被害軽減を目的とした防除適期は、乳熟期（穂が出始めてから10～15日後頃）です。なお、イネカメムシが主体の圃場ではやや早く、乳熟初期（出穂10日頃）から薬剤防除を行います。
発生量の多い地域では、出穂期～穂揃期と乳熟期の2回の薬剤防除が必要になります。
なお、その後はカメムシ類の発生を観察しながら、必要に応じて追加防除を行きましょう。
3. 出穂が周辺よりも早い水田、ヒエ等の雑草が多発している水田では、カメムシの飛来が集中しやすい傾向があります。
また、出穂の遅い水田では、周辺の水田で増殖した新成虫が侵入してくることがあります。特に、イネカメムシでは集中して加害し、不稔による減収や斑点米が多発生しやすいので、これらの水田では特に十分な注意が必要です。
4. 防除を行う際は、収穫前日数などの農薬使用基準に十分に注意してください。また、周辺に収穫期が近い圃場のある場合は、農薬の飛散（ドリフト）に十分注意して薬剤を選定してください。なお、ミツバチへの被害を軽減するため、ミツバチの活動が盛んな時間帯（午前8時～12時まで）を避け、可能な限り、早朝または夕刻に実施してください。



表1 水稻 カメムシ類の主な防除薬剤 (令和5年7月12日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
エクシードフロアブル	2,000倍	収穫7日前まで / 3回以内	4C
スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	収穫7日前まで / 3回以内	4A
キラップフロアブル	1,000～2,000倍	収穫14日前まで / 2回以内	2B
スミチオン乳剤	1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	1B

注) 1. 専用の少量散布用ノズルを装着した乗用型の地上液剤散布機器を用いる場合や、無人航空機を使用する場合には、それぞれの農薬使用基準を遵守して使用してください。
2. 分類欄には、IRACコードを記載しました。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。